上海の豫園における空間構成及び景観特性

茨城大学大学院　学生会員　○張　帆
茨城大学工学部　　正会員　　小柳　武和
茨城大学工学部　　正会員　　桑原　祐史

1．はじめに

豫園は上海の中心地に残る唯一の古典的庭園であり、中国の重要文化財の一つとして保護されている。2 ha という敷地の中に、30 個あまりの古典的な建物や築山、池、植栽などが配置されており、狭い空間に芸術品のように細かい工夫が多数なされている庭園である。図-1 は中国四大庭園の拙政園と豫園の平面図で、平成構成を比較すると、豫園は中国の名園と似ている部分が多く、中国庭園としての価値があることが分かった。

また、豫園は上海の一大観光地でもあり、一日平均約 4000～5000 人の観光客が訪れている。豫園は都市の中にあり、歴史性もあり、さらに成功した観光地として、非常に研究価値のある中国私家庭園である。

本研究では、豫園の既存資料と現地調査により、豫園の空間構成及び景観特性を考察することを目的とした。

図-1　拙政園と豫園の平面図

2．豫園の現地調査

豫園は方向や位置により四つの景区に分けられ、それぞれ西部、東部、中部と内園である。その中に西部や東部では面積が広く、さらにいくつかの建物を中心として区分され、その境界線は壁になっている（図-2）。

豫園は観光地なので、観光客の主な回遊ルートより見られる豫園はどういった私家庭園を表現しているかが豫園の景観特性ではないかと思われる。よって、多くの観光客が視点を置く視点場の把握が最も重要だと考えられる。

従って、現地調査において、観光客の行動調査により、回遊ルートを把握し、回遊ルート上に 39 箇所の視点場を選定し、写真を撮った。回遊ルートとその上の視点場は図-3 となる。

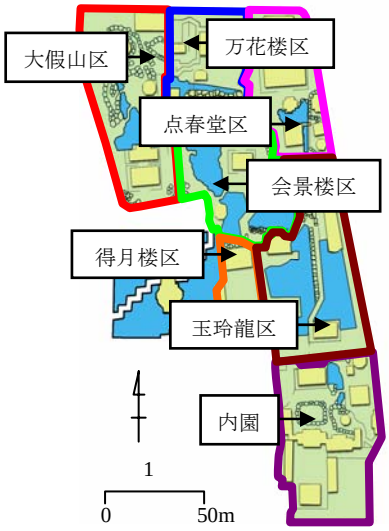

図-2　景区分割図

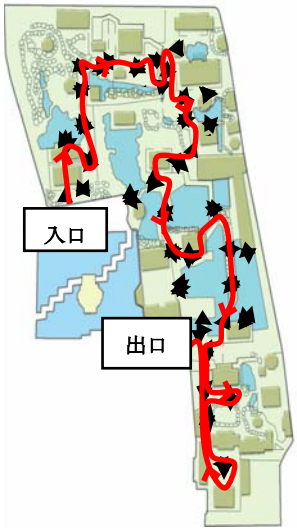

図-3　回遊ルートと視点場

3．視点場の分類

視点場は視点近傍の空間であり、それの状態は視点に近いため、その影響も大きく、景観の質も規定する。

本研究では、視点場を以下の 6 種類に分類し、定義した。表-1 に示す。

表-1　視点場の分類

分類	定義	視点場数
入口	入口は次の景区とつながり、風景はその点で変わっていくので、大事な視点場となる	6
通路	建物と建物の間にあり、あるいは、建物と壁に囲まれた通行空間のこと	8
広場	通路より広く、すぐ近くには壁などの障害物がなく、遠くに見渡せるような空間	8
橋上	橋は細長く、水面上にかけられる通り道のことで、屋根のないもの	2
廊下	ドアがなく、屋根の付いている通路、半面か両面がオープンである	8
室内	廊を除いた建物（楼閣、庁堂、亭など）内のこと、建物にある廊下のことも室内と分類する	7
合計		39

そういった視点場の属性を用いて、回遊ルート沿いの視点場に番号付けをし、視対象の入っている参考写真を添えてまとめた。

4．見られ頻度

ある地点が複数の視点から可視である場合、見られ頻度が高いといい、この地点は、いわゆる目立つ場所

キーワード　豫園，景観特性，空間構成
連絡先　〒316-8511　茨城県日立市中成沢町 4-12-1　茨城大学工学部都市システム工学科　TEL　0294-35-5261（内線 8070）

である。今回その見られ頻度も一つ大事な指標となる。

本論文では、視点場から取った写真を景区ごとに分け、そこでの視対象を整理し、見られ頻度を出してみた。表-2 に一例を挙げる。

表-2　大假山区の視対象及び見られ頻度（一部抜粋）

視点場	視対象											
番号	属性	山	石	植栽	水	建物						
						楼	堂1	堂2	廊	亭1	亭2	橋
1	入口		○	○			三穂堂					
2	通路		○	○			三穂堂		漸入佳境			
3	広場		○	○		卷雨楼	三穂堂		漸入佳境			
4	室内	大假山		○	○				漸入佳境	挹秀亭	望江亭	○
5	廊下	大假山		○	○	卷雨楼		仰山堂		挹秀亭	望江亭	○
6	通路	大假山		○	○	卷雨楼		仰山堂	漸入佳境			○
7	入口	大假山		○								
合計	ー	4	3	7	3	3	3	2	4	2	2	3

例に挙げている視点場番号は図-4 に示す。

表-2 からは、属性の変化（入口→通路…）や自然と建物の分布など、さらに最も被視頻度の高い建物の状況を把握することができた。

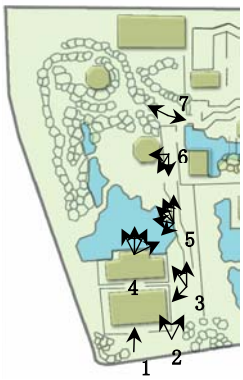

図-4　西部大假山区の視点場

５．豫園各景区の景観特性

①西部大假山区

人の歩く空間が狭いが、大きな山と多くの緑が本物の自然のような景色を見ることで、狭い感覚を和らげたと考えられる。“漸入佳境”という廊はこの景区で最も多く見られ、さらに自然を鑑賞するのに一番いい場所として、この景区の特徴であることが考えられる。

②西部万花楼区

この景区の特徴は廊が多く、また廊は広場を囲んであるため、広場に目を向かせたいことが考えられる。また、小さな自然界があって、真ん中に歴史性のある古木もあるので、自然に近づける景区だと思われる。

③西部点春堂区

建物の多い景区だが、山水が建物と建物の間分布しているので、圧迫感が感じられないと考えられる。また、景区にいる間“点春堂”は最も多く見られている大事な場所だと思われる。

④東部会景楼区

視点場はバラエティーで、次々と変わっていく視点場により、景色の豊かな景区を演出する。“流觴亭”の付近では最も多くの風景が観賞できる。

⑤東部玉玲瓏区

“玉華堂”の周りでは、最も豊かの景色が見られると考えられる。廊は真ん中にあり、ほかの建物は水の周りに分布してあるため、この景区には建物が景色として見られることが多い。

⑥内園

他の景区と比べるとちょっと単調であって、景色からの驚きはあまり感じられない。“古戯台”は最後になっているが、逆に最後にならないと見れないというのも一つの見せ方と思われる。

６．豫園の景観特性

①視点場について

・視点場がバラエティーに富んでいるため、遊客に興味をもたらすことができる。
・豫園には廊が多くの景区に配置され、最も重要な視点場となっている。
・廊は広場とセットになって豫園の空間で演出している。

②視対象について

・豫園は山水、植栽の処理にはよく工夫したので、巧妙な配置により、山水が自然にできたものようになっている。
・建物には堂と楼が最も多く占めている。その中東部玉玲瓏景区にある玉華堂は最も見られ頻度が高く、豫園全体の中心物となる。
・見られ頻度の高い建物は大きさ、高さ、長さのいずれかに特徴のあるものである。
・見られ頻度の低いものは園内の添景となる。

７．まとめ

視点場から見た視対象を整理することで、豫園の空間構成を把握できた。それに基づき、各景区の特徴を見出すことができた。回遊ルートのみに注目し、見られ頻度を指標とした分析を行うことにより、豫園全体の景観特徴が分かった。

［参考文献］

1)　楼慶西：中国の庭園、pp.7－22、五州伝播出版社 2003

2)　胡長龍、中国写意山水園論、千葉大園学報、第48号53－60(1994)

3)　上海市地方志辦公室ウェブサイド　2006.6　参照
http://www.shtong.gov.cn